

広島大学 高等教育研究開発センター 大学論集  
第 56 集 (2023年度) 2023年 7月発行 : 133-137

## ある研究室の記録

—17人のプロフェッサーたちが巣立って—

山 田 圭 一

ある研究室の記録

一人のプロジェクトたちが築立って

山田 圭

私達の研究室からはかなり多くプロジェクト  
 ッサーが築立っている。私が東京大学工学部  
 応用化学科の講師から、東京工大社会工学科  
 の助教授に移ってから10年ほど。その後  
 筑波大学社会工学系の教授に転任するまで  
 17年ほど比べると、研究室出身の教授18  
 名のうち15名は東工大時代の在籍者であ  
 る。表に示したようにその出身者のうち17名が東工大  
 卒である。東工大の教授を以て話している。  
 もちろん東大をはじめ、名門大学で優秀な  
 学生が集まっている研究室では、もっと多く  
 の教授を送り出しているところはいくつある。  
 しかし私達の研究室出身の教授達のように特  
 定の一つの分野だけでなく、さまざまな専門  
 分野で活躍しているというケースはあまりな  
 いようである。業績をあげている

このようなして、この研究室が生まれ

(20→20)  
 私達のスタッフと学生研究生  
 の集まったところ

## ある研究室の記録

—17人のプロフェッサーたちが巣立って—

山田圭一\*

私達の研究室からはかなり数多くのプロフェッサーが巣立っている。1968年に私が東京大学工学部応用化学科の講師から、東京工業大学社会工学科の助教授に移ってからの10年間と、その後、筑波大学社会工学系の教授に転任するまでの17年間に、表に示したように、その出身者のうち17名が、さまざまな大学で教授として活躍している。

もちろん、東大をはじめ、名門大学で優秀な学生が集まっている研究室では、もっと多くの教授を送り出しているところは少なくない。しかし私達のOBのように、特定の一つの分野だけでなく、さまざまな専門分野で業績をあげているというケースはあまりないようである。

どのようにして、私達のスタッフと学生研究生の集まった10数人の小さな研究室が活動してきたかについては、以下のようないくつかの特色があげられる。

- ① 優秀な学生たちが集まったこと——多くの大学について新設の学科や研究室に、チャレンジ精神をもった秀れた人達が集まることはよく知られている。そして東京工大の社会工学科も1967年4月に全国ではじめての学科として発足した。
- ② 研究室に加わることを希望する学生達が多様であったこと——社会工学科所属の者だけでなく、他学科からの学生もいたし、他大学の卒業生も無条件で受け入れた。
- ③ それぞれの学生の研究テーマを自分で決めるようにしたこと——従来の研究室の多くでは学生の研究テーマとして、それぞれの研究室の教授が取り組んできたテーマの一部を分担させたり、それらに関係あるテーマを選ばせることが通例になっている。しかし私達の研究室では、一人一人が自らのテーマを自由に決めることにしていた。日本の多くの大学では、入学試験の準備をしている頃から、如何にして与えられた問題をうまく解くか、ということが重視されている。しかし研究者にとっていちばん大切なのは、どのようにして自分が取り組むべきテーマを決めるかということである。そして、独創的であり、しかも、自らの力で解決していくことが可能であるようなテーマを選ぶことに研究者の運命がかけられている。
- ④ 学生達の指導にあたった歴代の助手たちが、いずれも非常に優秀であったこと——彼らは後に東京大学、東北大学、筑波大学、広島大学などの教授であるだけでなく、副学長、学部長、研究センター長などとしても活躍して、管理職としても重要な任務についている。
- ⑤ 研究室の定例ゼミ——1週間に1度は研究室の全員が参加するゼミが行われる。ここでは各自が自分の研究の進み具合について報告し、それについて他のメンバーからの質問、批判、助言などを受ける。その際全く異なった専門分野の学生からの、別の視野からの発言がとても有益で

---

\*筑波大学名誉教授

あることも多かった。このゼミでは、私自身は極力発言を控え、最後に簡単なコメントをすることにしてきた。そうでないと、学生達が私の言葉を気にしすぎて、自由に発言しにくくなってしまふ恐れがあるからである。そして、このゼミの後は月に二、三度はコンパになった。最近の大学では研究室にお酒を持ち込むことが許されなくなっているかも知れないが、当時はまだ学外にはそのような場所が少なかったこともあって、研究室で簡単なコンパをすることは他の研究室でも行われてきたようである。このコンパはゼミでの緊張を解きほぐすことにもなるし、同じ研究室の仲間として親しさを増すことにもなっていたようである。当時の研究室では、連日のように研究室に泊りこんで仕事を続けていた学生も少なくなかった。

- ⑥ 勉強会と自主ゼミ——上記のような研究室の全員が参加するゼミの他に、数人ずつ集まって、それぞれが共通の問題に関心のある勉強会やゼミを続けているグループがいくつかあり、テーマによっては助手が指導することもあるし、そうでなければ学生だけで自主的に取り組んでいるものもあった。このようなやり方で活動をつづけてきた結果、われわれの研究室の卒業生は17名の教授の他にも、中央省庁や地方公務員やシンクタンクの研究員、民間企業など様々な分野で活躍している。

このような研究室のあり方について質問される折に、私はその特徴を“放牧”と答えることにしている。そして放牧ということはそれは、相手をただ野放しにしておくのではなくて、それぞれの個体について絶えずその健康状態に注意し、水や食料が不足していないか、あるいは迷い子になっていた熊や狼に襲われはしないか、などに気を配っているということである。

そして、研究室の場合でも、個人個人が自由に研究を続けるためには、何よりも先ずそのために使える研究費を確保する必要がある。たとえば、当時研究のために使われていたコンピュータは、中型のものだけでも本体の他に入力のためのパンチカードその他のアクセサリを加えると、専用の部屋が必要で、レンタル料も非常に高額であって、大学から割り当てられた、1年あたり百万円程の研究費は全部そのために使われてしまっていた。もちろん、ベテランの研究者であればそれ程長い計算時間を必要としていたわけではないが、はじめてコンピュータを扱うことになる学生達は、今よりはずっと扱いにくい機器と取り組んで悪戦苦闘の末、やっとどうにか一人前に育っていった。従って、十分な研究費を工面するためには、当時科研費（科学研究助成金）と呼ばれていた、研究計画書を審査した上で、それを承認したものだけに給付されたる研究費や、民間のいくつかの研究助成財団から贈られる研究費、あるいはシンクタンクなどの共同研究などによって必要な額を確保しなければならなかった。

このような仕事に関しても、書類の作成や限られた研究費の管理などに苦勞された、当時の助手の方々には深く感謝している。いずれにしても、それぞれの学生達が自主的で自由な学習と研究を続けた結果、OB達は、卒業後も多様な専門分野で活動することとなった。そして17名の教授達の専門分野も、多岐にわたっている。

今になって振り返ると、このような結果を生んだ大きな要因の一つは、表に示された幾つもの専門分野が、いずれもあの当時は、そのライフサイクルから見て、非常に初期の発展段階にあった、という好運に恵まれていたことである。充分成熟していて、沢山の秀才が競い合い、その研究成果

を、十分に消化しなければ、最先端に追いつけないような専門分野であれば、大学院生レベルで自由に研究テーマを選ぶことは難しかった筈である。

さらに、私達の研究室がこのような方式を取るようになった、もう一つの原因は、私自身が新制大学の2期生で、東大をはじめ幾つかの大学で引き継がれて来た、優れた教授たちが、優秀な学生を育てるといふ、伝統的なエリートのための教育と研究の雰囲気の中で育ってきたことであった。

さらには、私自身が西ドイツに留学した折の学生生活の経験があった。当時のドイツでは、大学の数が少なく西ドイツ全体で伝統的な総合大学は僅か17大学しかなかった。それらに入学するための資格を認定するギムナジウム（高等学校）の卒業試験が非常に厳しく、その段階で大学生の数が絞られているという伝統的な教育制度がまだ保持されていた。そのため、学生達は一学期ごとに、どの大学に籍を置くこともできず、特定の専門分野の枠にとらわれることなしに、自由に学び研究するという、中世以来の伝統的な大学のあり方が生き続けていた。

そして何よりも、大学人としての私の生き方の根底にあるのは、東大総長になられた恩師向坊隆先生から受けた恩恵である。ゲッチンゲン大学理学部での2年間で学位論文をまとめた後に、フライブルク大学の哲学部で一年間を過ごした上に3年目も勉強を続けたいと考えていた私に、先生は「講師のポストを用意してあるけれどこれ以上待っていることは難しいので、早く帰国を」と促して下さった。しかし、その帰国後の私は、先生のご期待に反して、応用化学の研究者であるよりは、人間にとって科学技術は如何にあるべきかという課題と取り組むことを選ぶことになった。

しかし、先生は私が応用化学科の講師のまま、このような仕事を続けることを、快く見守り続けて下さったのである。そして、この御配慮なしには、私が大学人として生涯を送ることは出来なかった筈である。

	氏名	在職大学	専門分野	出身大学
1	M.U.	東北大	数理社会学	東大・工・応用化学
2	F.K.	東大	システム工学	東大・工・機械
3	T.H.	明海大・学部長	都市財政	東工大・社会工学
4	K.A.	東北大・副学長	高等教育政策	東工大・高分子
5	S.K.	広島大・副学長	高等教育政策 科学技術政策	筑波大・社会工学
6	S.K.	大阪国際大	科学技術政策 高等教育政策	東工大・無機材料
7	T.G.	成均館大	科学技術政策	成均館大
8	K.O.	東工大	科学技術政策	東大・工・応用化学
9	A.E.	埼玉大	高等教育政策	東大・法
10	F.Y.	静岡大	数理社会学	東工大・社会工学
11	A.H.	筑波大	システム工学	東工大・社会工学
12	M.S.	上智大	都市社会学	東工大・社会工学
13	I.W.	文教大	社会システム	東大・教養
14	T.N.	統計数理研	数理統計学	東工大・社会工学
15	S.Y.	広島大	高等教育政策	東大・法
16	M.I.	江戸川大	都市システム	東工大・社会工学
17	M.T.	大阪電通大	情報工学	東工大・数学

※氏名は、本人達の下承を得ていないので、イニシャルにとどめた